

真宗障害者福祉の実践試論

——「ピア・カウンセリング」を手がかりとして——

頼 尊 恒 信

一 「われら」の大地

真宗障害者社会福祉における思想的源泉は、親鸞の本願成就文に対する主体的な読みとりにある。至心信樂願文では、「十方衆生」と誓われている。この本願の機について、親鸞は「十方衆生」といふは、十方のよろづの衆生なり。すなわちわれらなり。」（『尊号真像銘文』・定親全Ⅲ―和文篇五五頁）と述べている。この「われら」とは、『唯信鈔文意』で「れうし・あき人さまさまのものは、みないし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」（『唯信鈔文意』専修寺本・定親全Ⅲ―和文篇一六九）という視座に他ならない。

親鸞は「われら」と述べると同時に、「われ」という表現も用いている。その「われ」とは、『歎異抄』に「親鸞一人」と言い伝えられる如く、「一人」としての「われ」なのである。つまり、「われら」と「親鸞一人」という自覚は別個な異なった了解ではない。本願の呼びかけを、主体的に聞くことが如

来によって願われている存在であるという、自覚的であり、「われ」の集合体が「われら」なのである。

この「共に本願の呼びかけの中にある身」としての「われら」の自覚は、「われらの地平」を必然的に生み出す。そこには、「同朋」、「同行」として、御門徒衆と強く結びついておられた親鸞の姿をうかがい知ることができる。つまり、親鸞は、「具縛の凡愚、屠沽の下類」と、社会の底辺で沈殿するように生きること余儀なくさせられていた「いなかのひとびと」と同じ「地平」に立っている。この「いなかのひとびと」とは、殺生等をつねに行い、「善人」や「聖者」として生きることが許されていない人々と言えよう。社会のただ中を生きる親鸞にとって、「いなかのひとびと」は、ただ社会の最底辺で、ぎりぎりのところで生きている人々ではなく、社会の構造として、殺生等をつねに行うことを「現に強いられる人々」として見えたのであろう。その共通性において、共業する「われら」と深く自覚されたのであろう。ここ

に、その「場」を生きる個人を問題とする考え方ではなく、その「場」を生きざるを得ない人々の課題を問題としているのである。

「いなかの人々」と「同朋」としての交わりの中で親鸞が顕かにされた救済観はいかなるものであったのだろうか。『歎異抄』に、「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」（『歎異抄』定親全IV・言行篇I—六頁）とあるように、親鸞の同朋観とは西洋社会における合理主義のような「地位向上的平等観」ではなく、「地獄は一定」という言葉に代表されるような「向下的平等観」といえる。

二 同朋としての地平と障害者運動

親鸞当時の「いなかのひとびと」が前にした呪術的、土着的宗教は、「最底辺の生活」をすることを強いているという社会構造を見えにくいものとする。いわば権力によって作り出された社会構造を補完するはたらきを持っていた。その点において、そのような宗教を信じざるを得ない「いなかのひとびと」が生活していた環境下において、「十方衆生」を対象とする阿弥陀の本願による救済を顕かにすることは、何よりも呪術的呪縛から人々を解放し、本願の地平に共に出遇っていかうとする歩みに他ならない。本願に帰入することは、「共業するわれら」が本願の呼びかけに呼応していくことで

ある。また、「本願の呼びかけ」に呼応することにより、自らの主体性が顕かになり、自らの立脚地が顕かになる。その上で、社会問題を「われら」の問題として、生活改善や社会変革などに立ち上がっていく力を如来から与えられる。そこに至って、共に「向下的平等観」を基軸として生きる「われら」としての主体的な集まり、つまり「講組織」となっていくのである。「講」のなかから、一向一揆のように「呪術的呪縛」から解放された者同志として、社会改善運動に立ち上がる「自覚的・われら」の集団が形成されてきたのである。

振り返ると、日本の障害当事者運動も同じような展開をしてきたと言える。日本における戦後の障害者運動の源流の一つに、一九五七年に結成された「青い芝の会」がある。同会は、日本初の本格的な障害当事者団体であり、当時、施設や在宅での療養を余儀なくされていた多くの障害者に光明を与えた。その「青い芝の会」の思想の形成に大きな影響を与えたのが、茨城県の閑居山願成寺の住職である大仏空（おさらぎ あきら）師の仏教観や人間観である。師は一九六三年から、約六年間にわたって、自坊にて約三〇人の障害者とともに『歎異抄』の精神を基軸とした共同生活を行った。その生活が、後に「青い芝の会」の精神となり全国に広まり、社会の障害者差別を厳しく糾弾していく、一九七〇年代の障害者当事者運動の中心的精神につながっていった。

真宗障害者福祉の実践試論（頼 尊）

つまり、現在の日本障害者福祉の原点となった障害者運動は、『歎異抄』を基軸とした生活によって養われた精神であると、断言しても過言ではない。この「青い芝の会」の運動も、「本願の呼びかけの中にある身」としての「われら」の自覚が運動につながったと考えることができるのである。このことが、日本における自立生活運動の萌芽であったことは言うまでもない。このように、ともに「われら」としての地平を自覚することにより「同朋としての向下的地平」としての真の人間解放につながり、障害者運動へとつながったと言えるのである。

三 本質的平等性の回復とピア・カウンセリング

前節で述べたことのみでは、実際には親鸞の同朋観と障害者自立生活運動の思想とは、直結することはできない。親鸞の同朋観は、あくまでも人間観や救済観である。その人間観や救済観に出遇い、その「向下的平等観」に生きようとし、障害当事者運動にリンクするためには、真に人間が解放された姿を具現化する必要がある。しかし、親鸞が開顕した仏道においては、本質的平等性を具現化する手段を持たない。

日本における自立生活運動は、障害者運動の中で日本化され、独自の歩みを行ってきた。その背景には、「青い芝の会」などの『歎異抄』を中心とした真宗のみ教えに基軸を置いた

障害者運動の影響がある。ここで、日本の障害者自立生活センターで行われている自立生活運動の手法に着目したい。

その自立生活運動の核となるものが、自立生活プログラムとピア・カウンセリングである。中でも、ピア・カウンセリングは、感情や、深層心理に働きかける要素が強い手法である。この「ピア」とは、同じ障害を持つ「仲間」という意味である。障害者はこれまで、医療や福祉の対象としてみられ、つねに専門家への依存度が高かった。そこでは、つねに健常者に近づくことが目標とされ、どこまで機能回復が出来たかが問題の中心的視点となっていた。このような医療化モデルの障害者観に対し、ピア・カウンセリングでは、「同じ障害を持つ仲間」ということを大切にする。この背景には、「障害者の自身」にこそ、生活を作っていくために何が必要なのか、専門家たちより、よく知っているという障害者運動思想がある。だから、ピア・カウンセリングは、「カウンセラー」という専門家によって行われるのではなく、同じ障害を持つ者同士が、同じ地平に立って行われる技法である。ピア・カウンセリングは、「治療」ではないのである。

また、ピア・カウンセリングが目指すものには、「①自己信頼の回復、②人間関係の再構築、③社会の変革」の三点があり、この「自己信頼の回復」は、ピア・カウンセリングの最も重要な概念である。本考察において、親鸞在世時の「い

なかの人々」にとって、「呪術的、土着的宗教は、権力によって作り出された社会構造を補完するはたらきを持っていた」とした。そして、「本願の呼びかけ」に呼応していくことによつて、いなかのひとびとが呪術的呪縛から解放され、「向下的平等観」を基軸として生きる「われら」としての主体が回復されると考えてきた。この「自己信頼の回復」とは、「自己のいのちそのものを全く無視し、「どこまで機能回復が出来たか」という視座でしか、障害者を見ない専門家中心主義の医療化モデルという呪縛から、どのようにして自己の本来性を回復していくかということが中心課題なのである。それは、向上主義に代表されるような、機の自覚を欠いた「欲望の肥大化」ではない。むしろ、「ピア」の思想とは、どこまでも「同朋」として、「われら」の中で、「いのちの本質的平等性」に出遇つていこうとしていく視座なのである。つまり、ピア・カウンセリングとは、抑圧から解放され、自らの主体性を回復していこうとする思想なのである。

前述のように、真宗自体には、医療化モデルのような専門家中心主義や、健常者至上主義から、自らの主体性を回復し、社会変革へとつながって行く手法は見られない。しかし、ピア・カウンセリングという、障害者自立生活運動の手法を参考にすることによって、医療化モデルの呪縛から解放され、本質的平等性に気づき、「向下的平等観」を基軸として生き

る「われら」としての主体が回復されることができるのである。

四 結びにーロールモデルとしての障害者の「生」

自立生活運動においては、「具体的な生き方の上で、人生の模範となったりする人」という意味で「ロールモデル」が用いられる。それと同時に自らが「道」を切り開いていくという意味で、ロールモデルとなっていくことが大切にされてきた。つまり、「人間の本质」に気付かされ、人が抑圧から真に解放されることは、「向下的平等観」のもとで、健常者中心主義であり、向上主義的な医療化モデルを变革していく「力」を得ることである。

つまり、その根源には、親鸞、「青い芝の会」、自立生活運動と受け継がれていった向下的平等観があり、それは親鸞の同朋観に他ならないのである。障害者自立生活運動の中で受け継がれている思想の根源には、向下的平等観に基づいた同朋観が「連続無窮」（『教行信証』・定本教行信証三八三頁）たるものとして、連綿と続いてきた精神としてあるのである。

〈キーワード〉 障害者、われら、ピア・カウンセリング、向下的平等観、同朋

（熊本学園大学大学院）